

# 寄せ場学会通信

No. 16

1992年2月27日

連絡先

167 東京都杉並区善福寺2-6-1  
東京女子大学松沢研究室気付  
電話 03-395-1211

概要決定!!

## 第6回総会

第1回 / 4月4日(土)

PM 2:00 開会, 学会事務討議

PM 3:00 研究発表 & 全体討論

### 《土と鉄の政治経済学》

——日雇い労働の光と影》司会/水野阿修羅

◇池田 潜士

「作家・火野葦平と若松港沖仲士労働組合」

◇青木 秀男

「アジアの都市下層

——スクォーターと寄せ場の類型論に向けて」

PM 5:00 終了, 引き続き懇親会

第2回 / 4月5日(日)

AM 10:00 研究発表 & 全体討論 《土と鉄の政治経済学》PART II

◇雑賀 恵子

◇八木 正

会場 京都大学西部講堂 (京都市左京区吉田泉殿町)

(問合せ先=西日本事務局/高槻市若松町8-26-103 ☎0726-61-5490和田)

去る二月十五日、京都大学教養部池田研究室において、今年最初の運営委員会が開かれました。出席は九名（うち運営委員八名）。以下、その内容を報告いたします。

### ①次回総会について

#### (ア)日程

一九九二年度総会は四月四日（土）、五日（日）の両日にわたり、京都市左京区・京都大学西部講堂にて開催する。当初は名古屋開催が予定されていたが、場所および作業スタッフの確保等を考慮して、場所を京都に移すこととなった。京都での総会開催は一九八八年（京大薬友会館）以来、四年ぶり二度め。なお、名古屋では今後、学会としてシンポジウムや学習会を設定し、活動の基盤を作っていくことが確認された。

#### (イ)内容・タイムテーブル

初日（四日）は午後二時より開会。総合同会は、通例に従って東西両支部から一人ずつ出て担当する。西日本からは下平尾直さん（関西大学学生）、東日本は未定。学会事務（前年度活動報告、新年度活動方針、運営委員選出など）の討議等のうち、研究発表・報告に移る。発表者は、青木秀男さん（広島修道大学／社会学）、池田浩士さん（京都大学／文学）

の二人。順番は未定。それぞれの発表タイトル（仮題）は、池田さん「作家・火野葦平と若松港沖仲士労働組合」、青木さん「アジアの都市下層——スクォーターと寄せ場の類型論に向けて」。終了予定は午後五時。そのまま同会場にて懇親会。

第二日め（五日）は午前十時より再開。発表者として、まず雑賀恵子さん（京都大学院生／農業経済学）、松沢哲成さん（東京女子大学／歴史学）の二人を確定し、さらに布野修司さん（京都大学／建築学）、八木正さん（金沢大学／社会学）にも要請を行なうことが決定。以上四人の発表を前提として、二日めの研究発表の統一タイトルを「土と鉄の政治経済学——日雇い労働の光と影」と設定し、その司会者に水野阿修羅さん（アジアフレンド）を決めた。終了予定は午後三時。

総会に関する運営委決定は以上のとおりだが、後日、部分的な変更（辞退など）があり、二日めの発表は結局、雑賀さんと八木さんの二人だけとなった。このため現在、タイムテーブルの調整が行なわれており、どうやら初日と二日めの計四本の発表を、すべて「土と鉄の——」のタイトルのもとに統合し、質疑応答を充実させる方向で固まる模様。なお二日めの内容は、雑賀さんが出稼ぎと女性について、八木さんが労働者間差別と建設労働について、それぞれ発表することになっている（タイトルは未定）。

### ②財政その他について

#### (ア)財政

九一年度収支状況の中間報告が書面で行なわれた。それによると、十二月三十一日現在で十三万三四三〇円の赤字。しかし、支出のきりつめには限界があり（すでに限界を超えているという声もある）、収支の改善には、何より収入を増やす以外ないことが（当たり前だが）確認された。この点で、待望されて久しい「フォー・ビギナーズ寄せ場」の刊行について、担当者の松沢哲成さんより「八月末までに原稿化したい」旨の発言があった。

また、昨秋のシンポジウム報告集のパンフレット化が、開催地である広島で現在進行中。今後は、各地でのシンポ、学習会をパンフレット化し、デザインを統一して（ただし地域ごとに若干のアレンジやカラーリングを施して）、財政面も含めた活動の補助手段とする方向が確認された。

#### (イ)通信

本紙「寄せ場学会通信」は、今号をもって西日本支部担当の任を終え、総会後は東日本支部に引き継がれることが確認された。

#### (ウ)規約改正

役員選出に関する学会規約の改正は、前回の反省点を踏まえて松沢さん、池田さんを中心に進められることになっているが、改正そのものは総会によって決議・承認されるので、四月総会では前回の方法で役員選出が行なわれる。この旨を確認。

× × ×

次回運営委は総会直前、四月四日午後一時より京大西部講堂にて開かれます。（報告／西日本事務局）

# 都市の変容と日雇労働者

日本寄世場学会の一九九一年秋季シンポジウムの一九九一年十一月二十三日、大島市西の志島キリスト教社会館で開催された。いわゆる地方都市のなかにも、中国地方の要衝とされる志島は一九九四年の「アジア競技大会」の開催地とすることが予定されているという特殊な条件も加わって、急激な変容が起られていると予測される。今回のシンポジウムは「メイン・テーマ」都市の変容と日雇労働者」を追究するにあたり、うつつり場の場と題して。しかも、その志島では、寄世場学会会員も多数参加して数年前から「志島夜更の会」が、日雇労働者の実態調査や救援パトロールを地道につづけてきている。そのようなかへ実践を裏打ちされた報告と、それにもとづく討論は、午後一時までの開始から六時半の一応の閉会まで、時間の経過も忘れずよき密度でつづけられ、さらには場所を移してこの交流会へとつづけて、迎へて貰うという果敢なこともあった。

参加者も、近隣の若国をはじめ、遠く東京、大阪、京都、さらには北九州、四国などの会員、会友もあつて、三十名並に及び、これだけの地元での体験や研究状況について語りあうことのみならず、報告と討論の会体は、近く、志島在住の会員からフォローアップ、小冊子のまとめられ、刊行される運びとなっている。(今後は、シンポジウムや共同研究の成果も、各支部や地元、他へのイベントや取り組み積極的なパンフレット化していくことと確認され、その外一冊として志島シンポジウムの小冊子としての制作途上にあること

とも、今回の大会を成果のひとつとせよ。

それにつけても、研究会としては、高松の現状を中心として「地方都市における下層労働者の現状」を報告していただくのは、すなわち木下正信さん(会員、高松市労働組合委員長)が、直前に労災事故で負傷され、参加が不可能と告げたことである。すなわち、その後の経過は良好で、以前と同じような健康状態にあるとのことなので、安心していただきたい。

以下において(志島)制作中の小冊子の完成を望むまじい増設等として報告と討論の報告をメモしてみたい。

A. 報告

① テーマ設定について——中山幸雄

かつては、「寄世場を扱れば、世界の見える」という豪言があり、一九六六年の映画「山彦」や「よきよりの山彦」の両面上映あり、キックフレームとしてもこの会業の用いられ。寄世場の現実を抽象化し一般化する事によって解放理論を形成するということにも、リアリティがあり、一九七五年六月の沖縄の焼身決起(皇太子杯沖に抗議)として熊本洲治の試みもこれだった。もちろん、映画「山彦」や「よきよりの山彦」の到達した地でも、このような寄世場把握の具体化はほのかなこと。

八〇年代になると、寄世場を被差別地域、寄世場労働者を被差別者集団として規定するところの意識が弱くなった。これは、かつて特定地域では現実性をもった規定だが、反相、現場実践、団結は一般化

する作業を怠らぬ、という精神をばんだ。若し二論による後退は、  
山谷における皇協会との激しい争い、谷崎暴動などの、在野地獄とい  
いまでも、という問題ともかかわってくるだろう。その間の規定を  
は、「なす者の自立」(風の抜園)かいはすれば可能か、また、地方で  
自らの足もとの「山谷」「谷崎」と対決している人々の山谷、谷崎は  
何か返すものか、という問題ともかかわってくる。

七〇年代の振盪的社会変動は、オイルショック以降、土木建築資本  
の却向のなかにし、つまりとあらわれており、OA化↓DA化の進  
行にともなう高度管理社会化は、労働者の労働力・流産対流  
阻止のめざすところ。人向の選別化と専制化が進む。世界的  
規模で、遺棄する人向の可視化してくる。春における労働者暴動、  
立川昭公園建設にけいさく公園の閉鎖化、日産労働者を大衆の収  
容し採取する総合病院、風の抜園の排除など、八〇年代前期の出  
来事は、このように管理社会の急激な破壊からとらえらるべきで  
う。土木建設(コンストラクション)、消費(コンサンプション)、管理(コントロ  
ール)のCCCは現代日本国家の図策である。とするオーストラリアの日本  
研究者、ガバン・マコーラの把握は的を射ている。

このようにして、いかに労働者の思い、あるいは既に解体された都市(一  
まり、より見え難い)という視座を捉えるべきか、いかに重要とすべきか。  
「労働者の問題」を私に自身のものとして捉え、そのことの切斷された  
問題を何とか修繕し、労働者側者ともいって現社会全体へと抵抗  
していくか、を念ひにしている。一九八〇年八月の「三多摩山谷  
の会」の提議は決定は、アラン・アリエールをもつた。具体的には、園芸事業  
や園・自治体のイベントによる都市づくり、都市の急激な変容  
と、日産労働者、労働者の排除、解体される都市の共同化(一)という

撃を返していくか、という課題を、いま私を直曲している。東京オリンピック  
による山谷の激変、大阪万博と谷崎の激変、さらに園地植樹祭、  
「海づくり大会」といって、地方都市の激変は、いま山谷には、九〇年一  
アリア建設大会に向ける逆風のなか、まさに急激に進行している。そ  
れば、労働者の現場の風景の激変として、我々の前に立ちあがっている。

### ① 八島島の「再開発」の歴史と現状 三宅聖子、島中靖

〔三宅〕八島は「日本の良心」としての歴史を「喪失」してゆくまで。  
つまり、軍都↓平和都市↓国際文化平和都市という道すがらある。  
八島を見れば、その時々の時の日本の政策がわかる。しかし、これは、社  
会的な矛盾や問題の集中させられない、ということでもある。ゆえに  
労働者とも、集中させられない。矛盾や問題は、計画やデザインに合  
わせないもの、見えざるものだからである。

八島の都市形成は、さまざま述べられる過程を辿る。戦後における  
歴史をもっとも示唆的なのは、資料上の基町相違通りの消滅である。  
八島のいわゆる倉庫街「根を返した」基町では、「高度成長期」のはいまり  
とも「関係」され、再開された。山下健三の設計による「整備」は、  
いかに少くとも多くの人向を収容するか、という基本理念によって進  
められた。洗車場なども、風を伴って行く、というふうな旧来の地域のつら  
かりは解体され、高層専中住宅に隔離された生活に変わる。

ところが、九〇年のアリア建設大会に向ける「八島元城都市圏計  
画」は、あとの島中への報告にもあるように、中園地方全体の経済圏化と  
高速交通ネットワーク化を軸に、生活システム全体を激変させることを構想して  
いる。そして、都市圏を国際交流という新しい計画に加えて、いわゆる「国  
際化」の一環として開放と推進している。これも大きな問題である。

1957(S.32) 基町に市が中層住宅建設=部分的には住宅用地として承認

1963(S.38)~ 河岸の不法建築の整理を県・市を中心に検討

布石として、「損害賠償金」の徴収・請求文書を送付  
=不法占拠の不承認を通知

市が基町地区を原爆被爆者救護の一環として、国の特別援助を求める運動を開始。 → 「原爆スラム」の呼称生れる

1966(S.41)~ 市内河岸の不法建築撤去

1968(S.43) 県・市で、住宅地区改良法適用に基づく再開発方針が生まれ、改良住宅の建設が始まる。

cf. 「この地区の改良なくして広島戦後は終わらない」

「基町地区再開発促進協議会」発足

目的：広島市基町地区不良住宅を解消し、同地区およびその周辺を広島市の中心としてみさわしい環境に整備すること。

- 県：地区内河川堤 の800戸除却
- 市：県の範囲以外の地区内の1800戸を除却

1978(S.53) 「基町地区再開発事業」終了

- 基町高層住宅へ移住
- 長寿園高層住宅へ移住
- 地区外へ転出
- 一般公営住宅へ転出

相生通り消滅

↓  
中央公園と河岸緑地が実現



基町再開発の概要

改良住宅(市)	1,954戸
改良住宅(県)	650戸
公営住宅(市)	1,054戸
公営住宅(県)	486戸
貸貸住宅(公団)	220戸
分譲住宅(公社)	204戸
<b>高層住宅</b>	
基町地区	2,964戸
長寿園地区	1,602戸

その他、中央施設(屋上緑地広場、1階ショップセンター、地階駐車場)、管理事務所、中央集会所、屋上遊歩道、小学校、幼稚園、保育所他、警察派出所、消防署、中央公園44.1ha整備、河岸緑地3.5ha造成、街路整備(東西1路線30m幅員、南北1路線20m幅員)、市立中央図書館建設





# 西日本支部は今春

## 労働ゼミ

### を開催します

by 事務局

寄せ場を研究する、寄せ場に関心を寄せる——そのためのアプローチは、より多様であることが望ましい。もちろん、その「研究」とは何なのか、が常に問われ続けるのだけれど。

日雇労働者ならぬ者が、寄せ場から就労することは、擬似的労働体験であり、それによって、書物、活字、聞き取りですら得られない就労システムや労働現場の在りようを知ることができよう。と、いう主旨で一九八八年春、「釜ヶ崎労働ゼミ」が実験的に行なわれた。四年ぶりに行なう今回も、べつにこれといって付け加えることはない。ただ、今回は、次につなげることを強く意識して、内容を設定するというだけのことだ。前回は、意に反して、やりっぱなしになってしまった。

今回の労働ゼミの概要は左のとおり。

- (1) 日程——三月二十三日(月)〜二十八日(土)。
- (2) 主な活動——早朝起床→寄せ場から就労→現場で労働→夕刻、釜ヶ崎に帰って集約・討論→ドヤで就寝。
- (3) ガイダンス——月曜日に集合。夕刻、釜ヶ崎か

らの就労について、最低限の、かつ必要なガイダンスを行なう。

(4) 集約——参加者は毎日、釜ヶ崎に帰ってから、その日の就労内容(業者、昼食、交通、賃金、現場の雰囲気など)をカードに記入する。そして、短時間のフリートーク(ゲストを招くことも有)。カードは中日や最終日の総括の材料になる。

(5) 中日——二十六日(木)を「中日」として、休みの日(就労しない日)とする。この日は、日中は釜ヶ崎およびその周辺を歩き、夜は中間集約と学習会(講師を招く)を行なう予定。

(6) 拠点——釜ヶ崎内キリスト教施設「旅路の里」にお願いできれば、と考えている。ガイダンス、集約、学習会等は拠点で行なう。

(7) フォローアップ——二十八日(土)就労後、集約・討論・総括を行なう。四月総会をはさんで、ゼミ参加者から報告者を選び、フォローアップ学習会を初夏まで開催。

他の細かい点(賃金・カンパ、保険加入、ドヤの泊まり方など)は今後煮詰める。重要な問題として、女性の参加希望者のゼミ内容も、決定していない。これについては、参加者個々の希望を(できるかぎり)いかして、フレキシブルに対応したい。

## 関西近辺にとどまらず、

### 多くの人の参加を、待っています!

## 西日本支部

### 短期集中中学習会

#### 「労働ゼミ」へ向けて

##### ※第一回

日時/3月15日(日) PM 5:30

テーマ/不況をどう見るのか、それをたたき台にして、釜ヶ崎(不況の真っ只中!)との絡みを考える

場所/京大教養部A号館中央3階

ドイツ語ゼミナール室

(☎075-753-6661)

##### ※第二回

日時/3月15日(日)あるいは16日(月)

PM 2:00

場所/京大教養部ドイツ語ゼミナール室

##### ※第三回

日時/3月26日(木) PM

場所/釜ヶ崎内

(連絡先) 西日本事務局/高槻市若松町8-26

1103 ☎0726-6115490 和田

## 後記

▽今号を最後に、この「通信」の発行担当は西日本支部から東日本支部へと移ります。年報のように、「通信」も編集委体制を組もうと志向しながら、ついに果たせなかった二年間でした。ただ一言、後任の方々の健闘を期待します。(W)